

マーチン・ルサー・キング Jr.

— 黒人指導者への道 —

酒 向 登志郎

1968年4月4日、テネシー州・メンフィスのローレインホテルで、伝説的非暴力の闘士、公民権運動の巨人、マーチン・ルサー・キング Jr. が、白人の精神異常者によって暗殺された。39才の若さであった。キングの側近の一人として、撃たれた彼の体を抱きかかえていた、当時26才であった、ジェス・ジャクソンが、奇しくも、その20年後の1988年春、大統領の予備選挙で、民主党の有力候補として全米の、世界の注目を浴び、白人権力者をあわてさせた。

結果的には、一時囃された民主党副大統領か、重要なポストへの就任という約束もなく、マイケル・デュカキス候補に敗れたものの、キングの非業の死は決して無駄ではなく、全ての人が平等に生きる社会アメリカを夢みた彼の戦いが、実現しかけているようにみえる。

しかし、思うに黒人社会が、あれほど熱狂的に一つの目的——ジャクソンを民主党の大統領候補にすること——にまい進したのは、それほどまでにジャクソンが黒人にとって、夢であり、希望であり、活力であったといえる。言いかえるならば、1950年代後半から1960年代初期の公民権運動（Civil Rights Movement）は、黒人に戦う勇気を与え、1960年代後期のブラック・パワー（Black Power Movement）は、人種の誇を黒人に与えた。その成果として、新公民権法と雇用機会均等法のもと、アメリカ社会の中枢を担う黒人新中産階級が誕生した。キングもその暗殺から18年後の1986年に、1月の第三月曜日を、彼の誕生を記念する連邦祝日とする栄誉が与えられ、しかも米国議会内の中央広場に、黒人としては初めて、その像が据えられた。

しかし、黒人社会の現状はそれほど甘くなく苛酷である。「祝日の20日、全国一斉に休日となったのは連邦政府職員だけ。22州の職員は出勤し、民間企業¹⁾のほとんどは平常通り営業した。」更に「84年現在、白人失業率が5.9%なのに対し、黒人は15%、平均年収は白人27,500ドル、黒人は15,400ドルで半分²⁾余りしかない。いずれも60年代より格差が広がっている。」

しかも1987年のタイム誌は、黒人人口約2,000万の $\frac{1}{3}$ がゲトー（ユダヤ人地区という意味ではなく、階級にすら属さない黒人居住地区）で生活し、 $\frac{1}{3}$ は貧困に苦しみ、10代の失業率が60%と報告している³⁾。

確かに、キングは、差別の激しかった深南部の黒人にとって救世主であり、黒いガンジー的存在であった。南北戦争後、政治的、社会的平等を白人社会に求めるより、経済基礎としての職業教育を推進したブッカー・T・ワシントンは、奴隷解放後の人種差別法（Jim Crow）に苦しめられていた南部黒人にとって、地位向上のチャンピオンとして期待を担っていたに違いない。ワシントンとは逆に、高等教育を重要視して、白人と全ての点で平等を主張した、W・E・B・デュボイスは、自信にみちた新しい黒人の夢であったろう。20世紀初頭、世界黒人改善協会（Universal Negro Improvement Association）を設立し、アフリカへ帰ろう運動を展開したマークス・ガーベイスは、黒人国家建設への希望の光であったろう。黒人ナショナリストのマルコムXとブラック・パワーの提唱者ストークリー・カーマイケルは、アメリカ社会変革への期待の星であった。

政治的力こそがアメリカ人種差別問題解決のキーであると信じ続けてきた黒人は、このように厳しい社会的、経済的現実を、いかに受けとめようとしているのであろうか。多数派白人が絶対的権力を保持している社会において、少数派黒人指導者の役割とはそもそもなにか、その役割に限界があるのか、どのような展望があるのか、と黒人指導者の歴史は問いかけている。

この問いに答える一つの試みとして本稿ではキングが指導者的立場に立った南部キリスト教指導者委員会（Southern Christian Leadership Conference, SCLC）結成までの外的・内的要因を考察してみる。

——モントゴメリー市、バスボイコット運動——

キングの名前が全米に知られるようになったのは、アラバマ州・モントゴメリー市におけるバスボイコット事件であった。

キングは、1929年1月15日、ジョージア州・アトランタに父マーチン・ルサー・キング Sr. と町の有力な牧師、アダム・ダニエル・ウィリアムズの娘で大学教育まで受けた母アルバータの長男として生まれた。家庭的には大変恵まれていた。当時黒人社会の約65%が、国からの経済救済を受けていた、衝撃的大恐慌のなか、彼は黒人中産階級の裕福な環境で少年時代を過ごす。

家庭教育は厳しく、特に規律が重んぜられた。キングは幼い頃からバランス感覚に優れ、感情を抑制することのできる子供であった。例えば、父の命令に対し、姉クリスティーンは服従し、弟のアルフレッド・ダニエルは反抗をした。キングは単純に反抗も服従もするのではなく、父の言葉を傾聴した上で自己の判断に従って行動した。そのことで、父に厳しい折檻を加えられたとき、涙は流しても、声を出して泣いたりしなかったという⁴⁾。

学校教育の面では、頭脳明晰で、飛び級をし、15才で父の母校モアハウス大学——南北戦争後、黒人教育のため、北部の博愛主義者や教会の資金援助により、南部に多くの黒人大学が創設された——に入学。年令のハンダーと思春期の悩みからか、成績は中位の学生であった。

感情的な黒人教会の雰囲気や、牧師の説教の在り方に強い抵抗を感じ、父の意志に反し牧師にならぬ決意をする。しかし、モアハウス大学の学長兼牧師であり、キングにとって理想的人物となったベンジャミン・E・メイズ博士と、宗教学部のジョージ・D・ケルシー教授の影響で父の跡を継ぐ決断をし、1947年、父の教会の副牧師となった。

より学究的牧師を志し、また黒人中産階級の出身とはいえ、苦い差別待遇の洗礼を受けた体験から、人種問題に強い関心を持ちつつ、ペンシルベニア州のクローザー神学校へ入学する。ヘーゲル、マルクスを知り、また社会における

教会の役割と責任はウォルター・ラウシェンブッシュから学び、マハトマ・ガンジーの非暴力抵抗に接した。そして、1951年6月、クローザー神学校を優秀な成績で卒業する。さらにボストン大学に学び、組織神学で博士号を授与される。

家柄、学歴、人脈のあらゆる点で、キングは黒人社会の超エリートの道を歩んできたといえるのである。

1953年6月、コレッタ・スコットと結婚。ボストン大学の博士論文のみを残し、全課程を終了したキングは、将来の職業について真剣に考えはじめる。北部の教会から二ヶ所、南部の教会からはモンゴメリー市のデキスター・アベニュー・バプテスト教会、そして大学関係からは三校、仕事の依頼があった。

母校モアハウス大学の学長で牧師のベンジャミン・メイズ博士を目標にしたキングは、牧師か教師か、また南部か北部かに懊悩した。優れた教育者になるためにも、一時的であれ、教会での経験は必要であると考え、牧師の道を選択する。南部か北部かについては、彼自身も妻コレッタも本意ではなかったが、二、三年、二人が育った南部社会に戻り奉職するのが道徳的義務であると結論し、デキスター教会に着任した。⁵⁾

1955年12月1日、アラバマ州・モントゴメリー市のモントゴメリー・フェア・デパートの裁縫婦ローザ・L・パークスが、バスで帰宅途中、白人男性に席を譲らず、運転手と揉め、市の人種分離法違反の罪で逮捕された。

彼女の逮捕を機会に、バスボイコットの強行と、バスにおける差別撤廃の法廷闘争とを計画したのはキングではなく、地元黒人社会の有力な指導者の一人で、全国有色人向上協会 (the National Association for Advancement of Colored People, NAACP—1906年、ニューヨークに設立され、主に黒人の権利を法廷闘争を通して求めてきた協会——) モントゴメリー元支部長のE・D・ニクソンであった。

ニクソンは、白人弁護士で数少ない進歩主義者クリフォード・デュアと連絡をとり、パークスを市の拘置所から保釈金100ドルを支払って出す。パークスはことを大げさにして、白人社会を刺激するのが好まなかったが、ニクソンの

熱心な説得で彼の計画に同意した。

一方、ニクソンの友人で黒人弁護士フレッド・グレイは、“Women’s Political Council”の会長で、黒人大学アラバマ州立カレッジの教師ジョアン・ロビンソンにバスボイコット計画を打明け、協力を依頼する。

更に、ニクソンは黒人牧師の賛同なくしてバスボイコットは成功しないと考え、若くて、はっきりと物を言うラルフ・D・アバーナシー師に協力と対策を持ちかける。アバーナシーはこの時はじめてキングの名前を出し、キングの教会を12月2日の初会合に使用させてもらえるよう要請することをニクソンに提案した。

教会がいかに黒人社会で重要な役割を果たしていたかE・F・フレイジアは次の様に論じている。「アメリカ社会において、社会的、精神的に孤立する黒人大衆にとって、黒人教会は国家の中の国家であった。」⁶⁾更にフレイジアは教会と政治の関係について、「黒人が、アメリカ社会の政治生活から追放された結果、黒人教会は彼等の政治活動の場となった。教会は、黒人が、大衆の指導者になろうと望むことのできる社会生活の主な場であり、抱負のある個人が、名を揚げ、地位を象徴することのできる社会生活の領域であり、権力への努力が⁷⁾実を結び、力への渴望を満たすことのできる活舞台であった」と述べている。国家の中の国家であり、活舞台でもあった教会における牧師の地位が、いかに絶対的なものであったかは想像できる。

ニクソンは早速キングに連絡をとり、協力と積極的支援を要望するが、キングは躊躇したと Bearing the Cross の著者ディビッド・J・ガロウは書いて⁸⁾いる。しかしキング自身は自伝的書物 Stride Toward Freedom の中で、「なんらかの抗議は必要だし、ボイコットはよい手段であると⁹⁾すぐに同意した」と述べているが、最初の子供ヨランダが生後一ヶ月にもなっていなかったこと、教会での責任が重いこと、それに重要な点は、南部の教会には二、三年奉職した後は教職に就きたいと考えていたこと等を考慮すれば、キングがやっかいな問題に巻き込まれたくなく躊躇したとしても不思議ではない。最終的には教会の使用と消極的参加に同意した。

12月2日金曜日、70人の指導者がキングの教会に集まり、12月5日月曜日、パークス裁判の日に、一日だけのバスボイコットを決議する。

ボイコットは大成功を収めるが、予想されたようにパークスには有罪の判決が下される。判決を不服として上告を決定すると同時に、アバーナシー、E・D・ニクソン、それにヒリヤード・チャペル・AME・シオン教会のエドガー・N・フレンチ師の三人は、抗議運動の長期化と、分裂した各公民権団体の統一を願い、新組織を結成すること、バス会社と市当局に対し、バスにおける差別撤廃要求をすることで意見が一致。午後の全体会議でその方針が採択される。

差別撤廃要求が承諾されるまでバスボイコットを続けようとした黒人指導者及び大衆の確固たる態度の背景には、公立学校における分離は違法とした最高裁判所の決定がある。1954年、元カリフォルニア州知事で最高裁判長官のアール・ウォレンが「ブラウン対トピカ市教育委員会」裁判で下したこの判決により、これまで「プレッシー対ファーガソン」裁判で最高裁判が1896年に出した、分離すれど平等 (Separate but Equal) という教育界における差別に終止符が打たれたのである。

新しい組織名としてはアバーナシーが提案した、モントゴメリー改善協会 (the Montgomery Improvement Association, MIA) が採用されたが、問題は会長人事であった。

人種差別がこれほど徹底的に、かつ長期的になされてきた理由の一つとして、黒人運動家の分裂が挙げられる。モントゴメリー市の黒人社会もいくつかの団体が勢力争いをしていた。“the Progressive Democrats”の党首、E・D・ニクソンと“the Citizens Committee”のルーファス・ルイスは宿敵であった。教会関係の長老には“the Baptist Ministers' Alliance”会長、H・H・ヒューバードと、“the Interdenominational Ministerial Association”会長、L・ロイ・ベネットの両師がいたが独断的なベネットは特に敬遠されていた。

各グループで内々の協議がなされ、キングとアバーナシーはルイスが適任であると考えていたが、ニクソンと友人のジェイムス・E・ピアスは宿敵ルイスを嫌いキングを候補に、そしてルイスとデキスター教会の信者、P・E・コンレ

イは当然ニクソンを避け、キングを推薦。結局、会長にはキングが選ばれる。この時、キングはモントゴメリーに来て約一年、弱冠26才の青年であった。

この運動に関係することさえ躊躇していたキングが、会長職を引き受けた理由は定かではない。キング自身は全てが突然で考える時間が与えられなかったと述べているが、¹⁰⁾アバーナシーは、¹¹⁾キングが辞退するものと思っていた。真実はよくわからない。しかしながら、キングが会長に選出されたその背景については三つの理由があったと考えられる。第一には指導者内部の分裂——ニクソン対ルイス——が生み出した妥協。第二は、J・B・シムズが論じているように、キング自身もバスボイコットの成功を疑問視していたと同様、指導者の多くは失敗した場合を恐れ、いけにえとして、全責任をキングに押し付けようとする意向が働いていたこと。¹²⁾第三として、キングがモントゴメリーに来て約一年という短期間のため、彼には白人社会にも、黒人社会にも、しがらみ¹¹⁾がなかったことが挙げられる。有能な牧師アバーナシーを会長とする案が提出されなかったのも、黒人社会のしがらみ¹²⁾と深い関係があったと思われる。

キングの指導者としての器量というより、モントゴメリーにおける黒人社会の内部事情や、対立する白人社会との関係で背負わされたMIA会長職であったが、このアクシデントがキングの重大な分岐点となり、彼の人生設計を狂わせたのは事実である。

1955年12月5日、ホルト・ストリート・バプテスト教会での夜の大衆集会で、1) バスの運転手が黒人の客を丁重に扱こと、2) 黒人は後から、白人は前から座席をうめて、席は譲らなくてよいことにする、3) 黒人街には黒人の運転手を雇うこと、以上三つの改善要求を議決し、ここに新しい闘争の歴史がはじまった。1日だけのボイコット予定が、なんと382日間という苦悩の戦いとなったのである。

誰一人予想しえなかったバスボイコット運動の長期化は、いくつかの点でキングを有力な指導者へと押し上げることになる。

バス会社、市長をはじめとする市当局、人種主義の組織である白人市民委員会 (the White Citizens Council) やクー・クルックス・クラン (Ku Klux

Klan)は、非暴力と白人への愛をもって整然と抵抗運動を続ける指導者と大衆への苛立ちと、長年保持してきた特権を失うことへの焦りと憎悪から、力による黒人封じ込めの作戦にでる。1956年1月30日、キング家のポーチに爆弾が投げ込まれる。怪我人はなかったが大ニュースとなり、新聞やテレビで報じられ、結果的にモントゴメリー市に、またMIA活動に人々の目が注がれるようになった。

会長キングが全米のみならず世界に名を知られるようになった事件は、1956年2月21日、モントゴメリー市当局がバスボイコットそのものが州法に違反するとして、約100名のMIA活動家を起訴した時である。ニューヨーク・タイムズとニューヨーク・ヘラルドトリビューンが第一面に記事を載せた。更に、ABCテレビもこのニュースをガンジーの英国に対する抵抗運動と比較しながら報道した。¹³⁾このような報道は、MIA運営に必要な資金が世界各国から送られてくるという派生効果をもたらした。

382日間の闘争はキング個人にとっても大きな試練の連続であった。順調にエリートの道を進んできた26才の青年にとって、MIA会長職はあまりにも酷であったと考えざるをえない。しかし、いくつかの試練を乗り越えたところにキングの偉大さをみることができる、とともにバスボイコット運動が彼を精神的にも、信仰的にも強い指導者に成長させたといえる。

市当局がキングをスピード違反で検挙し、刑務所に連行した時、彼は死への恐怖で体の震えが止まらなかったという。¹⁴⁾この体験により、「私の自由への闘争に対する決意はこれまでに¹⁵⁾なく強くなった」と述べている。

1月30日の爆弾事件が起こる以前より、脅迫電話が相次ぎ、キングの肉体と精神は限界に達していた。そのような状態の中、彼は神に全てを委ねる。「私はもうおてあげだった。……疲れはて、勇気もなくなり、神に全てを委ねることにした。……その時、今まで経験したことのない、神の存在を体験した。『正義のために立て、真実のために立て、いつも君のそばにいてあげるから』という神の内なる声が確かにきこえた。すぐに恐怖は消え、不安が消え、どんな¹⁶⁾なことにでも立ち向う心構えができた。』

新聞、テレビの報道を含め、健気に困難と戦うキングの姿に感動し、同情を示し、またM I A活動に関心を抱いた人が多くいた。とりわけ強く興味を抱いたのは、ニューヨークを中心に公民権運動を推進していた非暴力の唱道者、ベイヤー・ラスティンであった。ラスティンの助言と人脈なくして、あのキングは存在しなかったといっても過言ではないほど、キングにとってラスティンとの出会いは重要である。

公民権団体、平和団体、大衆運動団体、そして組合等の関係者と深い繋りがあるラスティンは、1910年、ペンシルベニア州・ウェスト・チェスターに生まれ、祖父母に育てられる。クエーカー教徒であった祖母の影響から人種差別に憤り、一時、“the Young Communist League”に加入する。党のあり方に矛盾を感じて退会したのち、非暴力反戦団体“the Fellowship of Reconciliation, FOR”の一員に加わる。この入会をきっかけに、当時最も著名な黒人指導者、A・フィリップ・ランドルフと知り合い頭角をあらわす。また第二次世界大戦には、良心的参戦拒否者 (a Conscientious Objector) として二年半投獄された。

元青年共産党員であったことや良心的参戦拒否者であったために、ラスティンの言動は常に連邦捜査局 (Federal Bureau of Investigation, FBI) にマークされていた。

その彼が1956年2月21日、モントゴメリー市に姿を現わしたことで、M I A 内部に大きな動揺が起った。部外者で大物活動家の存在により、煽動者によってバスボイコットが操つられているという誤解を招いたり、運動方針が勝手に変更されたりすることを怖れたE・D・ニクソンは、ニューヨーク在のA・フィリップ・ランドルフに不満の意を打明けたりした¹⁷⁾。ラスティンはニューヨークに戻り、作戦本部長の特別助言者としてキングを支えることになる。

2月27日には、FORの幹部で平和主義者のグレン・E・スマイレイが現地入りをする。テキサス生まれの白人牧師で、ガンジーの非暴力信奉者スマイレイは、キングとの初会見の時、キングがガンジーの非暴力運動についてほとんど知らなかったと述べている。「あなたはマハトマ・ガンジーを熟知してい

て、大いに影響を受けられたのでしょうかね。……ガンジーが誰であるかは知っていますし、書かれた書物をいくつか読みましたが、その程度のことで、ほんとうのところ、ガンジーについてはほとんど知らないのです。¹⁸⁾」

経験と勉強不足のまま会長の任に就いたキングの孤独な姿と、信頼できる人物に助けを求めたいという率直な姿が、スマイレィとの会話に写し出されている。その後、非暴力主義をキングに教示したのはスマイレィであった。

キングはラスティンとスマイレィの二人の助言者を後楯に、一段と自信に満ちた指導者になっていったのである。

1956年11月13日、最高裁判所は、モントゴメリー市におけるバスの人種差別は違憲とした下級裁判所の判決を支持。差別禁止令が12月20日に施行され、382日におよぶ戦いが終った。

——南部キリスト教指導者委員会設立——

キング自身の思惑ではじめられたわけではないバスボイコット運動が終結した時、彼は公民権運動の最も若く、激しい指導者になっていた。その時点での心境を次の様に述べている。

「このようなこと、何もかもがあまりにも急速に起こってしまい、どうしてよいか分からない。人はこれから先、私が奇跡を行うものと期待するであろう。27才が人生のピークで、あとは落ち目。そんな風にはなりたくないし、なにもできず人を失望させたくない。¹⁹⁾」

27才で人生の絶頂を終りたくない、終れないというキングの焦燥は、その後の彼の生き方にどのような意味を持つのであろうか。

焦り、苦しむキングの前に、ラスティン、スマイレィにつぐ第三の人物が現われる。1956年12月末、コレッタと共にボルティモアを訪れたキングは、ラスティンに三人の白人を紹介される。黒人大学ハーワードの法学を卒業した最初の白人で、ガンジーの研究家、ハリス・ウォフォードとその妻クレア。第三の人物は、ニューヨークの白人弁護士、スタンレイ・D・レビソンである。彼は、

1956年から南部の公民権運動家に資金調達をしていた団体 “In Friendship” の有力な会員であった。

レビソンの存在がキングにとっていかに重要になったか、ガロウは次の様に書いている。「キングは、レビソンの助力がいかに厳しく批判的であっても、深く感謝し、歓迎していた。²⁰⁾」その理由としてレビソンの二つの資性を挙げている。「第一は、仕事を含め個人的な頼みにも、報酬を求めることなく、キングを支えた点。第二は、正面きってキングを批判した数少ない人物の一人であったこと。²¹⁾」その上、レビソンは徹底的に陰の人物として行動した。キングは *Stride toward Freedom*『自由への歩み』の原稿を全てレビソンとラスティンに送り、校正を依頼しているにもかかわらず、出版されたその書物の序文に感謝すべき人物として彼等の名は特記されていない。これは推量であるが、陰の人物として存在しようとしたレビソンの考えでなされたことであろう。レローン・ベネット Jr. によって書かれたキングの伝記 *What Manner of Man* の中にもレビソンの名は一度も出てこない。

SCLC設立の起案者は、バスボイコットの場合と同様、キングその人ではなく、ラスティンであった。ラスティンは、モントゴメリー運動を南部全域に広げたいと考え、²²⁾キングに相談することなく、ウォフォードとレビソンに、その基本的構想を説明し、その実現にむけて検討をはじめていた。ラスティンが新しい会に対する活動内容の草案を作成し、キングは南部の黒人指導者と連絡をとることで二人は同意。1957年1月10日、11日の二日間第一回会議がキングの父の教会エバナザーで開催され、新しい組織づくりがはじまった。

ラスティンはこの運動の中心を南部におけるバスの人種的無差別待遇 (integration) と考え、団体名を “Southern Negro Leaders Conference on Transportation and Nonviolent Integration” と仮称したが、“Southern Leadership Conference” に変更する。最終的に、参加者の多くが牧師であったことや、キングの強い要望により SCLC と改称されたのである。

第一回会議では、運動に関する具体的内容まで討議されなかったが、大統領ドワイト・D・アイゼンハワーには、南部人種差別待遇廃止の支持を表明する

よう、リチャード・M・ニクソン副大統領には、南部の白人暴力の現状を視察するよう、そして法務長官ハーバード・ブrowネルには、黒人指導者と差別問題を直談するよう、それぞれに電報で要請した。

法務長官、副大統領、そして大統領という、所謂権力者と、直接的な関わりを持つことで、差別問題解決への糸口を意図したところに、新しいキングを見出すことができる。バスボイコット運動が法廷闘争であったがゆえに、長期間黒人大衆を苦しめる結果となった。キングはこの問題を解決すべき手段として、権力者を通し法律を改正する作戦に変更したと見ていい。更にキングは、奇跡を行える人となるには、権力者と直接会える関係をつくり出すことだと考えたに違いない。

第二回会議が2月14日、ニューオルリンズで開かれ、95人の指導者が参加する。ここで役員選出が行われ、キングが会長に就任。同じMIAからのアバーナシーが財務委員に選ばれ、正式にSCLCが発足したのである。

しかし、MIA会長を辞任することなくSCLC会長を兼務したことは、両団体にとって利点があったとはいえない。特にMIAにとって、精力をSCLCに注ぎはじめたキングの存在は、内部分裂の原因になった。これまで、キングだけが脚光をあびてきたことにたいするねたみと怒りがMIA内部で表面化しはじめた。2月18日に雑誌タイムがキングを特集した時、かつてのバスボイコットの計画者、E・D・ニクソンとキングの関係がさらに悪化する。結局MIAは、キングが会長職を辞任する1960年まで、新しい運動方針を打ち出せず、人事問題収拾にエネルギーを消耗した。

ついにキングが大物になる機会が訪れる。1957年3月5日の西アフリカ、ガーナの独立式典に他の黒人指導者と共に招待されたが、その時副大統領ニクソンと出会う。そして個人的に首都ワシントンを訪れるよう招かれたのであった。その結果、ニクソン副大統領との個人的会談が同年6月13日に実現。さらにアイゼンハワー大統領との会談の約束を取り付ける。

推測の域を脱しえないが、ニクソン副大統領がキングと直接会談する気になったのか、つまり黒人の代表者として認めたか、その理由として次の三点が挙げ

られる。第一に、キングのキリスト教の愛を柱とした非暴力抵抗方法が、差別撤廃運動として権力側が許容できるものであったこと。第二は、NAACPという既成の公民権団体と新興の団体SCLCを対立させ、差別撤廃運動を弱体化させること。第三は、次期大統領選挙に備え、若き黒人指導者のヒーロー、キングを利用し、黒人票を獲得することである。第二点に関して言えば、キングのNAACP批判などを契機として、彼とNAACP会長ロイ・ウィルキンスとの間で、運動方針をめぐり対立が生じたのは事実であった。

ニクソン副大統領との約束から一年後の1958年6月23日、アイゼンハワー大統領との会談が実現する。黒人の代表者、キング、ランドルフ、ウィルキンスと“National Urban League”会長レスター・B・グレインジャーの四人は差別改善要求書を提出した。大統領の反応は冷淡で、特に「アメリカ社会の構造に²³⁾変化をあたえるような要求に対して消極的であった」とキングは述べている。差別撤廃への要求、つまり平等社会の実現は、基本的にアメリカにおける白人絶対社会構造への挑戦であり、その意味において、保守派のアイゼンハワーに、黒人はなにも期待できなかったといえる。

1958年9月、キングの自伝的書物 *Stride toward Freedom*『自由への歩み』が出版される。ニューヨークのハーレムでサイン会を開いていたキングを、42才の黒人女性が日本製レターオープナーで刺す事件が起こった。犯人は、アメリカ暗殺史の犯人同様、精神異常者として扱われ、この事件は解決されてしまう。キングの暗殺者もやはり精神異常者として処理されている。

キングは、1959年2月2日より約一ヶ月間、インド旅行をする。ラスティン、レビソンとウォーフォードも勧めていたこの旅はキングにとって最も価値ある体験であった。²⁴⁾カースト制度と経済的貧困に苦しむインド国民に対する指導者ネルソンの努力に感動したキングは、アメリカ政府の黒人に対する無策に憤り、この旅を機会に貧困問題を闘争の主要テーマとするようになる。また宗教家としても、ガンジーの生き方に深く感銘し、帰国後は質素で、週に一日は黙想するガンジー的生活を試みるが失敗に²⁵⁾終わった。このことは、キングが宗教的指導者というより、政治的指導者であったといえる。

1959年11月29日、SCLCの任務や個人的講演の多忙などを理由に、デキスター教会の牧師を1960年1月末をもって辞任することを発表する。1960年1月31日、MIA総会でアバーナシーを新会長に推薦し、キングは会長職を退いた。キングはSCLCの本部アトランタに移り、会長職に専念する。SCLCの本格的活動が開始されたのであった。

キングが黒人の代表的指導者になるまでの道程を、主要な出来事を論じながら、辿ってみた。キングは、バスボイコット運動の発端やSCLC設立にみられるように、計画性や企画力にすぐれた立案者の指導者ではなく、むしろ人を纏め、統率する能力と、E・D・ニクソンがねたむほど人を引きつけるカリスマ性と雄弁さをそなえた、スポークスマンの指導者であったといえる。

紙数の関係上、黒人指導者の役割、その限界を論ずることはできないが、SCLC設立以降のキングの栄光と挫折を次稿で論じ、問いに応えたい。

注

- 1) 朝日新聞, 1月22日, 1986.
- 2) 同前
- 3) Time, 8月31日, 1987, p. 22.
- 4) Lerone Bennett, Jr., *What Manner of Man* (Chicago: Johnson Publishing Company, Inc., 1976), p. 24.
- 5) Martin Luther King, Jr., *Stride Toward Freedom* (New York: Harper & Row, Publishers, Inc., 1964), p. 7.
- 6) E・F・フレイジア, 『アメリカの黒人教会』, 未来社, 1972, 78頁
- 7) *ibid.*, 77頁
- 8) David J. Garrow, *Bearing the Cross* (New York: vintage, 1988), pp. 17-18.
- 9) King, *op. cit.*, p. 30.
- 10) *ibid.*, p. 42.
- 11) Garrow, *op. cit.*, p. 22.
- 12) Stephen B. Oates, *Let the Trumpet Sound* (New York: Mentor, 1982), p. 64.

- 13) Garrow, op. cit., p. 66.
- 14) King, op. cit., p. 109.
- 15) ibid., p. 111.
- 16) ibid., pp. 114-115.
- 17) Garrow, op. cit., p. 66.
- 18) ibid., p. 68.
- 19) Oates, op. cit., p. 109.
- 20) Garrow, op. cit., p. 105.
- 21) ibid., p. 105.
- 22) ibid., p. 84.
- 23) Oates, op. cit., p. 130.
- 24) ibid., p. 140.
- 25) ibid., p. 141.

